

# 上麻生発電所取水堰堤

岐阜県加茂郡

お盆明けに発生したしぶとい雨雲が岐阜県付近を東に抜けた朝、加茂郡の飛騨川の川面は陽光を浴びて茶褐色の濁流が渦巻いていた。飛騨川と白川の合流点から下流に約2km、切り立った断崖を跨ぐ上麻生発電所取水堰堤は鋼製のローリングゲートを巻き上げ、その奔流を流下させている。設備のメンテナンスに訪れていた業者が「これほどの流量は珍しい。久しぶりにゲートが開いている姿を見たよ」と教えてくれた。普段はほんの少し開放されたローリングゲートから落ちる白滝のような水流、周囲の断崖と緑、川面のエメラルド色が相まって絶景を見ることができるといふ。

堤高約13m、堤頂長約75mのこの重力式コンクリートダム  
の竣工は1926年。常時はここで取水された河水を右岸側の水路管経由で6kmほど下流の細尾谷ダムに送水し、上麻生発電所で最大27,000kWの発電を行っている。第一次世界大戦後に増大した濃尾の電力需要に応えるべく建設された発電施設の一つだ。石張りのゲートピアとその上に置かれた機械室がなんともレトロな佇まいだが、今に至るまで100年近く木曾川水系の水力発電事業の一面を担い続けている。目を引くのはやはり国内最古といわれる2門のローリングゲートだ。幅約27m、高さ約5m、円筒外形約3.8mのドラム状のゲートはワイヤーによって巻き上げられ回転しながら開門、堆積した土砂や洪水を流下させる。国内で稼働する事例は希少で、水門柱や機械室などの外観の美しさと技術的価値が評価され、2018年に（公社）土木学会の推奨土木遺産に認定された。一方でその役割を現に果たしている姿を目にすると、「遺産」というにはいささか礼を欠くような気分させられる、紛うことない「現役」の土木施設だ。



翌朝、上流側から再びその雄姿を狙った。ローリングゲートが若干閉じられて水流は穏やかさを幾分取り戻しているように見える。上流側は堰き止められ湛水されつつあった。この貯水池の水は岐阜県中部の上水、灌漑用水としても供されている。

